

新型コロナウイルス感染後の急性心筋梗塞のリスクがワクチンで低減

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染後に急性心筋梗塞および脳梗塞の発症リスク上昇には、血栓症リスクの上昇が関連することがこれまでに示されている。新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）ワクチン接種は、感染および重症化予防には有効であるが、二次的な合併症の予防への効果は不明である。本研究では、新型コロナウイルスワクチン接種が、新型コロナウイルス感染後の急性心筋梗塞や脳梗塞の発症リスクに影響するかについて検討した。

韓国の新型コロナウイルス感染症レジストリ（感染・予防接種について）および国民健康保険のデータベースを用い、後ろ向きコホート研究を実施した。新型コロナウイルス感染症に感染後の急性心筋梗塞および脳梗塞の発症状況について、ワクチン未接種者と2回接種者で比較した。対象者は、2020年7月から2021年12月に無症候者も含めて新型コロナ感染を診断された18歳以上の成人231,037例であった。そのうち、2回接種者は168,310例、未接種者は62,727例であった。追跡期間の中央値はワクチン接種群で84日、未接種群で90日であった。ワクチン未接種群の31例、接種群の74例が新型コロナ感染の診断から31～12日後に急性心筋梗塞または脳梗塞で入院したが、100万人・日あたりの入院発生で見るとそれぞれ6.18、5.49であった。解析の結果、急性心筋梗塞、脳梗塞による入院リスクはいずれもワクチン未接種群と比べて接種群で有意に低く、調整ハザード比はそれぞれ0.48（ $P=0.03$ ）、0.40（ $P<0.001$ ）であった。

今回の結果から、新型コロナウイルスワクチンの2回接種により、新型コロナウイルス感染症に罹患後の急性心筋梗塞および脳梗塞のリスクが低減することが示唆された。とくに、心臓血管病のリスク因子がある場合には接種が推奨されるといえる。

出典：Journal of American Medical Association. Published online July 22, 2022.

doi: 10.1001/jama.2022.12992